

## 蔡大鼎の漢詩文と琉球の遊里

高津 孝

蔡大鼎（さい たいてい）は、一八二三年（道光三年、尚瀨二〇年）生まれで、字（あざな）は汝霖、久米村の人である。後に父の跡を継いで伊計親雲上（与那城間切に属する伊計村の脇地頭）となる。中国へ五回渡り、最後は北京で客死したと推定されている。没年ははっきりしないが、一八八四年（光緒一〇年、明治十七年）以降とされる。琉球王国末期から、琉球処分（一八七二年琉球藩、一八七九年沖縄県）を経る激動の時代を生きた文化人である。

琉球漢詩人としての蔡大鼎は、琉球王国時代の漢詩人中、最も多くの詩集が確認された詩人である。これまで、知られていた詩集は、沖縄県立図書館（旧東恩納寛惇文庫）所蔵の以下の四点であった。

閩山遊草一卷附統閩山遊草一卷 同治十二年（一八七三）刊本  
北燕遊草一卷 同治十二年（一八七三）刊本  
北上雜記六卷 光緒一〇年（一八八四）刊本 卷一、二のみ残存

これら四点は、いずれも中国での詩歌、文章が中心となっている。また、最近になって、以下の五点が発見された。これらは琉球で詠まれた詩歌、文章を集めたものである。

漏刻樓集一卷附伊計村遊草一卷 咸豐十一年（一八六一）序刊本（慶應義塾図書館所蔵） 自序は道光二十八年（一八四八）  
欽思堂詩文集三卷 咸豐十一年（一八六一）序刊本（慶應義塾図書館所蔵） 自序は咸豐元年（一八五一）  
續欽思堂集一卷附聖覽詩文稿一卷 光緒三年（一八七七）刊本

（早稲田大学図書館所蔵、写本・関西大学図書館） 続欽思堂集…自序は同治五年（一八六六）。聖覽詩文稿…自序は同治四年（一八六五）

本論考は、蔡大鼎の『欽思堂詩文集』三巻に収められた琉球国内で詠まれた妓女、遊里に関連する詩文六十二編を対象とする。『續欽思堂集』一卷、『聖覽詩文稿』一卷には、妓女、遊里に関連する詩文は見当たらない。

### 琉球の遊里

琉球王国には、遊郭が三つあった<sup>1</sup>。辻（つじ）、仲島（なかしま）、渡地（わたんじ）の三つである。辻は那覇西部に位置し久米村に接する。辻村全体が遊郭という特殊な村であった。仲島は那覇の南東部に位置し泉崎村に属する。元は中洲で、泉崎村と陸橋で繋がっていた。渡地は、那覇の南東部に位置した小島で、南と東、西は那覇港に面する。東村に属し、東村とは思案橋で繋がっていた。那覇は港町で古くから妓女は存在していたと考えられるが、康熙十一年（一六七二年）に妓女を集

1 以下の記述は、『沖縄県の地名』（平凡社、二〇〇二年）による。

めて王府の管理下に置き、辻と仲島の遊郭が成立した。渡地成立の時期については不明。明治四十一年（一九〇八年）には沖繩県の条例で仲島、渡地の遊郭は廃止されて辻の遊郭に統合され、辻の遊郭も第二次世界大戦で消滅した。

『欽思堂詩文集』三巻には、蔡大鼎の三九歳以前の詩文を収めるが、辻の遊郭は、昂氏の別荘の位置を示すための地名として一箇所出てくるのみである<sup>2</sup>。一方、仲島、渡地は、那覇八景の一つとして「仲島晩雨」「渡地絃歌」と歌われ、「述土歌」十四首中にも「仲島曲」「渡地曲」と歌われているが、辻はない。辻の遊郭は蔡大鼎の家のある久米村に接していることから、行かなかつたわけではないと考えられるが、蔡大鼎の詩文には明示的には出てこない。

蔡大鼎の遊里詩文には、実に様々なシチュエーションの詩歌が含まれる。作者が遊里に呼んでほしいと要求する詩歌、また、呼んでいたお礼の詩歌、作者が友人を妓楼に呼び出す手紙、作者から妓女への詩歌、妓女から客人への詩歌、妓女に夫を取られた妻から夫への詩歌などがある。形式も連作詩（述土歌は十四首連作）、言葉遊びを含む詩歌、遊戯的詩歌があり、さらに次韻の詩歌もあることから、当時、遊里、妓女を題材にした漢詩の創作仲間がいたことが分かる。遊里は、江戸文学において文化的創造の場でもあったが、琉球においても遊里は一

2 「題昂氏別業有引併詩」の引に「波上之南、辻山之北に數十畝の園圃有り」（『欽思堂詩文集』巻二・二葉裏）。

3 『伊計村遊草 訳注解説』（うるま市教育委員会、2014年3月）参照。

定レベルの文学の場であったと推定されるのである。

例えば、「謝久米村筆者招飲章臺」「謝林公招飲章臺」「謝鄭慶雲招飲章臺」は全て「章臺」（妓院の集まる場所）に招かれたお礼の詩歌であり、若く貧乏な蔡大鼎は酒宴に招いてもらい、そのお礼に詩歌を送ったのであろう。事実、蔡大鼎は久米村士族の中でも決して家計の豊かな方ではなかつたことがわかつている<sup>3</sup>。こうした漢詩の応酬は、現在では蔡大鼎の作品しか残されていないが、おそらくは琉球の漢詩人たちの間ではごく普通の儀礼的応酬であつたのであろう。

妓女の固有名と遊戯的詩歌

妓女の固有名が示される詩歌として、以下のものがある。

伊保真加、是妓名、將其四字、每句上、分用之、俗稱冠首、三首皆類此（「伊保真加（いほまか）」は妓女の名前である。その四文字を各句の頭に用いた。これは俗に「冠首」という。三首ともにこの技法を用いている）

其一

伊人窈窕意纏綿、伊人の窈窕にして意は纏綿たり、  
保護郎公粉黛妍。郎公を保護し粉黛妍なり。

真有傾城嬌媚態、真に傾城嬌媚の態有り、

加情鍾愛貼花鈿。情を加へ鍾愛し花鈿を貼る。

其二

海棠麗色看難厭、海棠の麗色 看れども厭き難し、  
戀紫貪紅意自牽。紫を戀い紅を貪り意自ら牽く。

一樣溫柔誰是最、一樣の溫柔 誰か是れ最なる、  
加那撫媚獨爭妍。加那は撫媚にして獨り妍を争ふ。

加那妓名。

加那は妓名なり。

この詩では、第一首に「伊保真加」と言う妓女の名が、第三首に「加那」と言う妓女の名が読み込まれている。特に一首目は、「伊保真加」を分解して各句の頭に置くという技法が用いられており、遊戯性の強い詩となっている。「伊保真加」は、小野まさ子氏よりの教示では、「伊保」と言う遊女屋の「真加」と言う名の妓女の可能性がある<sup>4</sup>。現実に琉球時代の妓女の固有名が分かることは稀で、この詩は、貴重な例である。

女性の月経を詠む詩

「偶因史女有經水口號絶句四首」（偶然、史女どのに「經水口號絶句」の作があったことに因んでの作 四首）は、女性の月経を詠み込んだもので、題材的に極めて珍しいものである。詩題に「史女の經水口號絶句有るに因る」と言い、「史女」なる人物が作った「經水口號絶句」に次韻したものとなる。「史女」は用例があまりなく不明であるが、妓女の中で教養あるものを

4 『欽楽郷 辻情話史集』（沖繩郷土文化研究会、一九六〇年二版）には、辻の遊郭の懐かしい屋号として「伊保」の名が挙がっている。  
5 『欽思堂詩文集』に「史女」は3回出てくる。本詩の他、遡返曲に「經過臨邛欲曉天、偶逢史女月中仙。不嫌四境雞聲達、却恐雲霞起日邊」（卷二・四十三葉裏）と警年少文「暮則醉史女、而宿烟花」（卷二・五十七葉裏）に用例がある。このほか、「女史」という言葉も、同様

指しているようである<sup>5</sup>。「經水」や其二に出てくる「癸水」は女性の月経を指す。「口號」は、一般的に即興の詩を指し、絶句は漢詩の詩型であるが、「口號絶句」が具体的に何を指すかは不明。即興の漢詩ではなく、琉歌をさした可能性もある。遊里での客と妓女との駆け引きを歌ったものとして注目される。一首目は、せっかく金をかき集めて遊里へやってきたのに、月経を理由に断られることをユーモラスに歌う。二首目も、遊里で妓女に対して酒が進み、その気になったのに月のものに邪魔をされることを歌う。三首目は、客の方から、まさかこころで来て夕刻になったら月のものを理由に断ることはないよねと念を押す客の描写、四首目は、いい感じになっても肝心の時に断られるのでは、夢の中で遊んだほうがましであるとの客の述懐を歌ったものである。

妓女から那覇を離れた客人への詩

小妾寄呈鄭相公三首（妓女のわたくしが、鄭の旦那さまにお手紙を差し上げる 三首）其一

小妾寄呈鄭相公、小妾は鄭相公に寄呈し、  
多情散入五雲東。多情は散じて五雲の東に入る。

の意味で使用しているようである。例えば、「寄送閩省女史婦娥啓代作」（卷一・十葉表）は、福州で知り合った馴染みの妓女に出す手紙の代作で、文中「緬想女史、管弦樓上、繞繞春風。羅綺叢中、徘徊夜月」は明らかに妓女を指している。また、「和周兆麟贈女史韻」（卷二・四十八葉裏）も「青樓第一掃蛾眉、美目清揚粉不施」とあるので、妓女を指すものであろう。

時郎公爲師在首里。時に郎公は師と爲りて首里に在り。

屋梁落月看顔色、屋梁の落月に顔色を看れば、  
衣帶寛舒錦水中。衣帶は寛舒なり錦水の中。

― 出世して那覇を離れ首里に行ってしまった鄭という人物へ向けた詩で、各詩の冒頭に同一の句を置く形式は、民謡調である。

正妻の立場

妓女側に立った詩ではなく、正妻側に立った詩もある。「閨門怨」（閨門の怨み）がそうである。

與君結髮歷多年、君と與に結髮して多年を歴るに、  
莫奈君心逐物遷。奈ともする莫し 君が心の物を逐ひて遷るを。

把鏡試看顔未改、鏡を把りて試みに看れば 顔は未だ改まらず、  
緑衣黄裏自憂煎。緑衣黄裏 自ら憂煎たり。

閨門は、寝室の入り口の門で女性の部屋を指す。緑衣黄裏は、『詩経』邶風・緑衣「緑兮衣兮，緑衣黄裏」（緑の衣よ。緑の衣に黄色の裏）に基づく。黄色が正色で緑は間色である。間色である緑を衣の表地に、正色である黄色を裏地とすることは、身分秩序の転倒になるのである。妓女にうつつを抜かす主人に対して、正妻が儒教倫理を盾に苦衷を吐露する詩である。

福州社会との接点

蔡大鼎『欽思堂詩文集』卷二には、「懐六兄維祥曲蹄婆二首」（いとこの蔡維祥（六兄）どのの妓女を懐かしむ二首）という詩がある。内容は、蔡維祥の抱えていた妓女を讃え、懐かしむものであるが、「曲蹄婆」という言葉で妓女を指す点が他の詩歌と異なる。

ここに出てくる「曲蹄婆」と言う言葉は、もともと、中国華南の沿岸部、河川部で生活する水上生活者「蛋民（タンミン）」の福建での別称、賤称である「曲蹄」に基づく。「婆」は口語で、年配の女性、何らかの職業についている女性を指す。『福州方言詞典』（江蘇教育出版社、一九九八年）によれば、「曲蹄婆」は「1. 蛋民の船妓。2. 蛋民の婦女の蔑称」の二義があり、ここでは1の意味で使用されている。この言葉は、福州の妓女文化に接していた琉球士族の間でよく知られた言葉であったらしい。琉球官話『官話問答便語』（『琉球王国漢文文献集成』第三十四冊・六八一―六九頁）には、端午の節句のハーリー船見物のシーンに「無錢的只站在岸边或在那橋上去看。還有漁婦、我們土語叫做曲蹄婆、頭髮梳得光光的、簪花首飾帶起、臉上把粉擦得白白、耳邊掛耳墜、双手帶着手鐲戒指、身穿兩件好的新鮮的衣服、拿着竹篙、站在船頭、攤來攤去、都在那江心撫掄、真真鬧熱」（お金の無いものは、ただ岸边あるいは橋の上に立って眺める。また、我々が土地の言葉で「曲蹄婆」と呼ぶ漁師の婦人が、頭髮を綺麗に結いあげ、簪や首飾りをつけ、顔には白粉を白く塗りつけ、耳にはイヤリングをし、両手には腕輪と指輪をはめ、質の良いはやりの衣装を重ねて身につけ、竹棹を手

に船端に立ち船を並べてはみな河の中心で操っているのは、本  
当に賑やかだ」とある。<sup>6</sup>

清・郭柏蒼輯『竹間十日話』巻五には、「金鏡、字は肅明、  
生員となるも、はなはだ貧乏で、漁業を生業とする人々の一族  
と通婚した。福州で「賣漁嫂」（漁師の妻）とは「曲蹄婆」の  
ことである。彼らは船の中で成長するので、両足が曲がり、そ  
う呼ばれたのである。金鏡が死亡すると、卑しい身分となり、  
子孫は科挙の試験を受験できなくなり、船から陸に上がること  
も禁じられた。半片髻と言う髪型で、農婦の妻と区別した。結  
い上げた髻に中簪を挿したものがいれば、農家の妻はむやみに  
殴った。最近三十年ほどでやっと混じり合うようになった。中  
洲、田んぼ、湾内で「曲蹄婆」と呼ばれているのは、妓女が漁  
師の妻の名を借りたもので、故に訴訟になるとゆつたりとした  
ズボンを履いて、漁師の妻と称するのである。」<sup>7</sup>と言う。こ

6 また、訂正部分には「那無錢の只站在岸辺或在那橋上。數不清的  
那些曲蹄婆，頭髮梳得光光，簪花首飾帶起臉上，把粉擦得白白，耳  
掛着耳墜，手中帶着手鐲戒指，身上穿着兩件新鮮衣裙，拿着竹篙立在  
船頭撐去，都在那裡擺浪，真真鬧熱得緊」と言う。

7 清・郭柏蒼輯『竹間十日話』六卷（光緒十二年（一八八六）刊本）  
巻五には、「金鏡，字肅明，作秀才，貧甚，與賣漁人通譜。福州所稱  
賣漁嫂，即曲蹄婆。以其生長船中，兩足俱曲，故名。沒為賤種，子孫  
不得應試，例不登岸。作半片髻以別田婆。有梳髻帶中簪者，田婆輒  
之。近三十年始溷矣。洲邊田中灣里所稱曲蹄婆，乃妓女托為賣魚嫂，  
故涉訟則穿弛縵褲，稱漁婆。人為之語曰：「月照池塘，漁人錯認金鏡」。  
按：鏡居玉尺山，以仕耿逆流口外。金鏡，閩縣人。順治壬辰進士。鬻  
為何提督傅宅。『明清進士題名碑錄索引』下・2289「金鏡，福建閩縣，  
清順治9/2/62」（上海古籍出版社，一九八〇年）。

こでは狭い船中で育ち、足が曲がっているので「曲蹄」と言う  
と説明されている。一般の農婦とは異なる髪型「半片髻」をし  
ていること、「中簪」（不明）をすることが禁じられていたらしく、  
中簪を挿していると農婦から殴られることがあったが、最  
近三十年ばかりは区別がなくなってきたこと、また、金鏡  
は順治九年壬辰（一六五二）の科挙に合格し進士となった人物  
であるが、蛋民の女性と通婚したため、身分を落とされ、子孫  
は科挙を受験できず、陸にも上がれなかったこと、「曲蹄婆」  
と呼ばれているのは、実際には妓女で、裁判沙汰になると、服  
装を変えて、漁師の妻と言っている、と言う。

「蛋民」は被差別民であったこと、彼らへの蔑称が、同様に  
差別視されていた妓女たちに適用されることもあったことは、  
次の資料にも述べられている。『侯官縣鄉土志』では、「蛋民は  
蛇の子孫である（陸次雲《桐溪織志》巻上・蛋民に見える）。  
色目人（西域出身の人）であると言う人もいるが、おそらく牽  
強付会の説である。彼らは船を住まいとし、漁業を職業とし、  
水上で生活をして、潮の満ち引きにしたがって行き来し、川岸  
や海岸に、随所に住み着いた。それぞれの集団は港ごとに分か  
れ、お互いに領域を侵すことはなかった。たまたま陸上に家を  
構えるものもいるが、概ね彼らも商業に従事せず、土木作業に  
も従事せず、身分の卑しいものに習って、平民と一緒にするこ  
とを恥じた。閩人はみな彼らのことを「曲蹄」（曲がった足）  
と呼ぶのは、その姿を形容しているのである（彼らの足が湾曲  
していることが多いためである。俗に「乞黎」ともいう云々）。  
彼らを奴隷のように見なすのは、その人品を卑しむためであ

る。甚だしきは、遊郭の数多くの妓女たちが、なんとその名を多く詐称するようになった(花柳界では、俗に「白面厝」(厝は家。)と呼び、また「曲蹄婆厝」とも言った)のは、彼女たちが最終的に下流に溺れて、自ら抜け出せないことは、概ね察することができるからである。」と言う。また、『閩縣鄉土志』では、「閩県には、舟を住居とし、長時間、水中に潜ることが可能な人々がいて、俗に曲蹄と呼ばれている(割注・舟の中で生活し、足は常に曲げて伸ばさないようにしているためである。或いは乞黎とも言い、浙江の惰民(訳注・江蘇、浙江に散在して住居する一群の人々で、一般人と通婚せず、官吏になれなかった)のように卑賤視されている。彼らは一般人を忌み嫌い、通婚しない)。おそらく、「蟹戸」(訳注・『宋史』『元史』に見える)であろう(割注・「蟹」字は省略して「厝」字に作ることもある)。河川沿いや海浜部のあちこちに居住し、水上

8 清・胡之楨修、清・鄭祖庚纂『侯官縣鄉土志』八卷(清光緒二十九年(一九〇三)刊本)「厝之種為蛇、(割注・見陸次雲《峒溪織志》)。有謂為色目人者、蓋附會之詞也。其人以舟為居、以漁為業、浮家泛宅、遂「逐」潮往來、江干海濱、隨處棲泊。各分港澳、不相凌躐。閩間有結廬岸上者、蓋亦不業商賈、不事工作、習於卑跣、不齒平民。閩人皆呼之為曲蹄、肖其形也。(割注・以其脚多彎曲故也、俗亦謂之為乞黎云云)。視之如奴隸、賤其品也。甚而女閩三百、竟多假托其名、(割注・花烟間、俗呼白面厝、亦謂之曲蹄婆厝)。則其人之終溺下流、不能自拔、概可知矣」。陸次雲《峒溪織志》卷上・蜃人(七葉裏)「其人皆蛇種」(問影樓輿地叢書)所収。「女閩三百」・清・紀昀『閱微草堂筆記』卷四「倡族祀管仲、以女閩三百也」。『戰國策』東周策「齊桓公宮中七市、女閩七百、國人非之、管仲故為三歸之家、以掩桓公」。『韓非子』說難「昔者桓公宮中二市、婦閩三百」。

に家を構えたが、一定の場所に所在することなく、それぞれ港ごとに分かれて住んでいる。姓には翁(割注・漁翁から意味をとった)、歐(割注・鷗鳥から意味をとった)、池、浦、江、海(割注・地名を姓にした)が多い。彼らの中にはたまたま陸上で居住する者もいたが、海上生活をするものと同様に技術や商業を習うことなく、賤役(卑しい仕事)に従事した。(割注・妓女は曲蹄と偽ることが多かった)と言う。実際には、妓楼に所属する妓女は全てが蜃民ではなく、妓楼の偽装であったようである。こうした福州の妓女文化に福州滞在中の琉球人たちは接触しており、その結果、彼らの使用する中国語語彙(琉球官話語彙)に「曲蹄婆」が取り入れられ、蔡大鼎の詩歌にも出現することになったのである。

#### 訳注編

以下は、琉球・蔡大鼎『欽思堂詩文集』三巻中の遊里関係詩文に訳注を加えたものである。詩歌が五十九首、文章が三篇あり

9 清・呂渭英修、清・鄭祖庚等纂『閩縣鄉土志』八卷(清光緒二十九年(一九〇三)刊本)「縣有一種之人、以舟為居、能久伏深淵、俗呼曲蹄、(割注・以處舟中、其脚常彎曲不舒故。或作乞黎、賤視、如浙惰民、不齒齊民、不通昏媾。蓋叩蟹戸也。(割注・「蟹」亦省作「厝」)。江乾海濱、隨處有之、雖浮家泛宅、無一定之所、而各分港澳、姓多翁(割注・取義漁翁)。歐(割注・取義鷗鳥)。池、浦、江、海(割注・以地為姓)。諸氏間有登岸結廬者、然亦不習工商、仍供賤役。(割注・倡家多詭托之)」。

る。妓女、遊里に関連すると判断したものを抜き出したもので、これで尽くされているわけではない。遊里、妓女を明示していない酒に関する詩文も多くは遊里関連の詩文と考えられる。

目次

- 1 謝久米村筆者招飲章臺 卷一・三十五葉
- 2 謝林公招飲章臺 卷一・三十五葉
- 3 謝鄭慶雲招飲章臺二首 卷一・三十五葉
- 4 其二
- 5 遊渡地村即興 卷二・二十八葉
- 6 (那霸八景) 仲島晩雨 卷二・二十七葉
- 7 (那霸八景) 渡地絃歌 卷二・二十七葉
- 8 仲島曲此以下十四首、皆述土歌、故用曲字、仲島村名、卷二・四十一～四十三葉
- 9 寄妾曲
- 10 答郎曲
- 11 渡地曲
- 12 警人曲
- 13 寄思曲
- 14 青樓曲
- 15 寄郎曲
- 16 病中曲
- 17 愛我曲
- 18 夢君曲
- 19 感物曲

- 20 憶郷曲
- 21 邂逅曲
- 22 戲贈同僚陳氏 卷二・四十三葉
- 23 戲贈存留官林氏時任主考 卷二・四十四葉
- 24 戲求鄭氏邀到娼門二首 卷二・四十四葉
- 25 其二
- 26 戲和梁兄同遊娼門韻二首 卷二・四十五葉
- 27 其二
- 28 娼門漫題四首 卷二・四十六葉
- 29 其二
- 30 其三
- 31 其四
- 32 青樓回後書懷三首 卷二・四十六葉
- 33 其二
- 34 其三
- 35 寄告紅衣 卷二・四十七の一葉
- 36 小妾寄呈鄭相公三首 卷二・四十七の一葉
- 37 其二
- 38 其三
- 39 小妾寄呈梁郎公 爲師在仲里御殿四首 卷二・四十七の一葉
- 40 其二
- 41 其三
- 42 其四
- 43 偶因史女有經水口號絶句四首 卷二・四十七の二葉
- 44 其二

- 45 其三  
 46 其四  
 47 娼門怨三首 卷二・四十七の二葉  
 48 其二  
 49 其三  
 50 閨門怨  
 51 懷人卽席二首 卷二・四十八葉  
 52 其二  
 53 懷六兄維祥曲蹄婆二首 卷二・四十八葉  
 54 其二  
 55 和周兆麟贈女史韻 卷二・四十八葉  
 56 伊保真加、是妓名、將其四字、每句上、分用之、俗稱冠首、  
 三首皆類此 卷二・四十八葉  
 57 其二  
 58 其三  
 59 邀請同僚梁阮陳三位 卷二・五十三葉  
 60 邀請魏先生啓時在妓家 卷二・五十四葉  
 61 邀請孫先生啓時在妓家 卷二・五十四葉  
 62 邀請毛先生啓時在妓家 卷二・五十四葉

1 謝久米村筆者招飲章臺 久米村筆者の章臺に招飲せる  
 に謝す（久米村筆者が妓院での宴會に誘ってくれたことにお礼  
 を言う）

愛惜良宵月色光、愛惜す 良宵 月色の光

邀行柳下百花香。邀へて行く 柳下 百花の香  
 新豊美酒多兼味、新豊の美酒 兼味多く  
 醉臥高山樂未央。酔ゐて高山に臥すも 樂しみ未央きず。

月の光にあふれたこの素晴らしい宵の時刻が愛おしい。私は  
 宴會に招かれて、柳の木の下、多くの花（妓女たち）が香る中  
 に出掛けていく。新豊の美酒にも比すべき巨酒に、数々の酒肴。  
 高山流水の曲が演奏される中、酔っぱらって臥せってしまつて  
 も、この楽しみは尽きることがない。

筆者・久米村での職階。吏員。章臺・妓院の集まる場所を指  
 す。招飲・人を招いて宴會を催す。良宵・美しい景色の夜。月  
 色・月を指す。新豊・地名。現在の江蘇省丹徒。美酒の産地。  
 兼味・二種以上の酒肴。樂未央・「長樂未央」の略。永遠の樂  
 しみが尽きない。高山・「高山流水」は琴曲名。

2 謝林公招飲章臺 林公の章臺に招飲せるに謝す（林公  
 が妓院での宴會に誘ってくれたことにお礼を言う）  
 邀到青樓裏、邀へて青樓の裏に到れば、  
 花香馥馥飄。花香は 馥馥として飄ふ。  
 妖嬈姿最麗、妖嬈として姿は最も麗しく、  
 窈窕色逾嬌。窈窕として色は、逾嬌たり。

醉我葡萄酒、我を酔わしむ 葡萄酒の酒、  
 憐卿楊柳腰。卿を憐む 楊柳の腰。  
 此情何有盡、此の情 何ぞ盡きること有らん、  
 解使百愁消。解く百愁をして消せ使む。



林公から招かれて、妓楼に到着すると、花の香りが馥郁と漂っている。妓女の姿はあでやかで、世の中で最も麗しく、その様子はしとやかで、ますます愛らしさを加える。葡萄の酒で私は酔い、貴方の細い腰を慈しむ。この気持ちは終わることなく続き、あらゆる愁いを消し去ってくれる。

青樓…妓楼。馥馥…香りの強いこと。妖嬈…あでやかな様。窈窕…しとやかな様。楊柳腰…女性のほっそりとした腰つき。元・張可久・梧葉兒・席上有贈「芙蓉面、楊柳腰、無物比妖嬈」。

3 謝鄭慶雲招飲章臺二首 鄭慶雲の章臺に招飲せるに謝す二首（鄭慶雲が妓院での宴会に誘ってくれたことにお礼を言う。二首。）

其一

傍山傍水上青樓、山に傍ひ水に傍ひて 青樓に上る、  
酒到酣時興未休。酒到りて 酣なる時 興は未だ休まず。

忘却俗情同李白、俗情を忘却す 李白に同じ、  
今朝稍覺趣悠悠。今朝 稍か覺ゆ 趣の悠悠たるを。

山に近く水辺にも近い道をとおって妓楼に上がり込むと、酒が入って酔っぱらった時であっても詩的興趣は尽きない。李白と同様、酒を飲んで俗世間の詰まらぬ感情を忘れ去った私は、今朝になって詩的興趣のなお無限に湧き起こるのを感じている。

俗情…世俗の感情。

4 其二

同遊昨夜酒兼花、同遊 昨夜 酒 花を兼ね、  
國色天香不足誇。國色 天香 誇るに足らず。  
飲到更殘月落候、飲みて更殘に到りて 月落ちる候、  
渾忘西嶺斗牛斜。渾て忘る 西嶺に斗牛斜めなるを。

昨日、一緒に妓楼に出掛け、お酒と美女を楽しんだ。国一番の美女、かぐわしい香りを放つ美しい花にも比すべき美女も誇るに足りない。それ以上の素晴らしい一夜である。酒を酌み交わして夜明けに近づき、満月が沈むころ、もう西の峰に斗宿、牛宿の二つの星座が斜めになる時刻であることをすっかり忘れてしまっていた。

國色…国一番の美女。『公羊傳』僖公十年「驪姫者、國色也」。何休注「其顔色一國之選」。国色天香…もと、ボタンの花の姿、香りの素晴らしさを言ったが、後に女性の美しさを形容する言葉として使用されるようになった。唐・李潛『松窗雜錄』に出る。更殘…一夜を五等分した五番目が五更（殘更）。斗牛…二十八宿の中の斗宿と牛宿。現在の射手座、山羊座付近。唐・賈島・逢博陵故人彭兵曹「踏雪攜琴相就宿、夜深開戶斗牛斜」。二十八宿とは、中国古代の天文学用語。天の赤道上の二十八の星座。

5 遊渡地村即興 渡地村に遊ぶ 即興（渡地村に出向く

即興）

冬風凜冽雪窓中、冬風凜冽 雪窓の中、

邀到青樓興味同。邀まよかれて青樓に到り興味は同じ。  
酌酒花前終夜醉、酒を花前に酌み 終夜酔ひ、  
連朝無意返江東。連朝 意として江東に返る無し。

冬の風は極めて冷たく、窓に積もった雪の明かりで読書をす  
るような厳しい生活にあったが、招かれて遊里にやってきて  
も、沸き起こる興趣は以前と変わりない。美しい妓女たちを前  
に酒を酌み交わし、終日酔っ払い、海を渡り東に位置する久米  
村の家に戻る気持ちはもう何日も湧いてこない。  
凜冽・極めて寒い様。興味・興趣。

6 (那覇八景) 仲島晩雨 仲島の晩雨  
經過中島夕陽天、中島を經過す 夕陽の天、  
雨洒芭蕉碧色妍。雨は芭蕉を洒あちひて碧色妍けんなり。  
同醉金樽歸去晚、同じく金樽に酔あちみて歸去するの晩、  
一鈎新月小橋邊。一鈎いっこうの新月 小橋の邊。

夕日の射す中、仲島を通りすぎたところ、雨が降ってきて芭  
蕉の葉を洗い清め、葉の緑が美しかった。仲島の遊郭で友人と  
酒を飲み、一緒に帰る夜更けには、もう雨は止み、針のように  
細い新月が小さな橋の向こうに見えている。

金樽・酒樽の美称。

7 (那覇八景) 渡地絃歌 渡地の絃歌 (渡地遊郭での音曲)  
何處清新曲一聲、何處いづこぞ清新なる曲一聲、

前村渡地百花明。前村の渡地に百花明らかなり。  
此地妓女所居。此地は妓女の居する所なり。  
遶梁餘嚮行雲遏、梁はりめぐを遶る餘嚮ととに行雲とと遏まり、  
愁殺少年無限情。愁殺す少年無限の情。

清らかで新しい曲の音が聞こえてくるが、どこからであろう  
か。それは目の前の渡地村の遊郭からであり、そこには美しい  
妓女たちが大勢いて華やいている。(ここは妓女のいる遊郭で  
ある) 梁をめぐって空へと響く優美で忘れがたい楽曲の余韻  
は、空行く雲も押しとどめ、若者の際限ない感情を憂鬱にさせ  
る。

遏雲・空行く雲を停止させる。歌声の美しさの形容。『列子』  
湯問篇に基づく。愁殺・深く憂いを生じさせる。「殺」は程度  
の甚だしさを表す。

8 仲島曲 仲島の曲 (仲島の歌)

此以下十四首、皆述土歌、故用曲字、仲島村名、

此れ以下十四首は、皆な土を述べる歌なり。故に「曲」字を  
用いる。仲島は村名なり。(これ以下の十四首の詩は、すべて  
地元の風俗を歌った歌である。ゆえに「曲(うた)」という字  
を用いている。仲島は村の名である。)

仲島江頭一望平、仲島江頭一望平かなり、  
冬風凜冽月輪生。冬風凜冽りんれつにして月輪生ず。  
浮鷗對對相呼友、浮鷗う對對として相友あひを呼び、  
更聽松邊萬籟聲。更に聽く松邊ばんらい萬籟の聲。

仲島村は、那覇川のほとりに位置し、一望すれば平地が延々と続いている。冬の風が寒々と吹く中、月が天に登ってきた。川の中に浮かぶカモメはつがいをなして、それぞれ友を呼び、さらに、松林に風が吹き抜け、世界全体が声をあげているかのようだ。(仲島の遊郭からは、カモメのように、男女の声が聞こえ、さらに松林が風に鳴るように、三線の音色が聞こえてくる。)

仲島…現在の那覇市泉崎一丁目。もと久茂地川河口の中州で、埋め立てた後、康熙二十一年(一六七二)以降、遊郭となつたらしい。明治四一年(一九〇八)、辻に統合された。凜冽…極めて寒い様子。月輪…丸い月。一般に月を指す。浮鷗…カモメ。萬籟…自然界の万物が発する音。あらゆる音。

9 寄妾曲 妾に寄す曲(彼女に贈る歌)

妾在東西萬里邊、妾は東西萬里の邊に在り、  
多情常惹夕陽天。多情にして常に惹く夕陽の天。  
况思夜半床頭語、況んや思ふ夜半床頭の語、  
恍見嬌姿夜不眠。恍として嬌姿を見 夜眠れず。

あなたは遙か遠いところにおられるが、私は思いが深く、常にあなたの居る夕日の方に心惹かれる。まして、夜半寢床での会話を思い、あたかもその美しい姿を見ると、夜も眠れない。

10 答郎曲 郎に答ふる曲(彼氏に答える歌)

一腔愁思夢魂飛、一腔の愁思に夢魂飛び、  
獨倚斜陽玉淚揮。獨り斜陽に倚りて玉淚揮ふ。  
偶解羅衣憐妾瘦、偶たま羅衣を解きて妾の瘦せたるを憐まん、  
正同滿月減清輝。正に滿月に同じく清輝を減ず。

胸いっぱい憂いの気持ちに、私の魂は夢の中であなたの元に飛んでいく。現実の私は、夕日の中、欄干にもたれて、あなたを思つて涙を拭う。たまたま薄絹の装いを脱ぎ去れば、あなたに恋焦がれる私はすっかり痩せてしまったことを哀れんでくれるでしょう。なぜなら、それはちょうど滿月が欠けてその清らかな輝きを失ってしまったのと同じだからです。  
愁思…憂いの気持ち。羅衣…薄絹で作った衣服。

11 渡地曲 渡地の曲(渡地の歌)

攀登渡地石巔頭、渡地の石巔の頭に攀登し、  
渡地村名。石巔山名。渡地は村名なり。石巔は山名なり。  
一望長江八月秋。一望す 長江八月の秋を。  
短棹連鯨垂釣處、短棹連鯨して垂釣する處、  
可憐聚散共波浮。憐む可し聚散して波と共に浮ぶを。

渡地村の石巔山にのぼり、周りを一望すれば、那覇川に秋八月の風景が広がっている。小舟を連ねて釣り糸を垂れているところでは、小舟が近寄ったり離れたりと、波と共に浮かんでいる様子が目に入り実に愛らしい。

渡地…現在の那覇市東町。東村の属村で思案橋で繋がっている

た。遊郭があつたが、明治四一年（一九〇八）、辻に統合された。  
巔・山頂。石巔は、渡地村東端の岩山（硫黄城跡）を指すか。  
長江・那覇川を指す。短棹・小舟。連鯨・舟を並べること。  
垂釣・釣り糸を垂れる。

12 警人曲 人を警する曲（警告の歌）

存心戒滿是青年、心に存し滿を戒むるは是れ青年、  
惟日孜孜尚古賢。惟れ日に孜孜たるは尚ほ古賢。  
才學勝人人自慕、才學 人に勝れば人自ら慕ふ、  
有名無實等欺天。有名無實は天を欺すに等し。

心に仁と礼を抱き、自己満足を戒めるのは青年であるが、  
日々たゆまず励むのは古代の賢人である。才能と学識が優れて  
いれば慕われるが、有名無実であることは天を騙すに等しい。  
存心・仁と礼を心に抱くこと。『孟子』離婁下「君子所以異  
於人者、以其存心也」。趙岐注「存、在也。君子之在心者、仁  
與禮也」。惟日孜孜・日々たゆまず励むこと。『尚書』君陳「惟  
日孜孜、无敢逸豫」

13 寄思曲 思いを寄せる曲（思いを告げる歌）

青樓握手尺書傳、青樓に手を握り尺書傳へ、  
夜夜朝朝思渺然。夜夜朝朝思ひ渺然たり。  
獨坐西廂情不盡、獨り西廂に坐せば情は盡きず、  
猶同斷節藕絲牽。猶ほ節を斷つも藕絲牽くに同じくす。

妓楼で、妓女と手を握り、家に戻ってからも手紙を送る。朝  
も晩も彼女のことを思い続け、私の思いは果てしない。一人西  
の対屋に座っていると、彼女への思いは尽きない。それはちょ  
うど、ハスの根が折られても、糸は繋がったままであるのと同  
様である。

渺然・遙かな様。唐・趙嘏・江樓書感「独上江樓思渺然」。  
藕絲・レンコンを折ると、粘着性の成分が糸状になって、糸を  
引いたように見えることから、相手への愛情が途切れないこと  
の比喩に用いる。

14 青樓曲 青樓の曲（妓楼の歌）

雁宿沙頭夜月清、雁は沙頭に宿り夜月清し、  
多愁潮滿共哀鳴。愁多く潮滿ち共に哀鳴す。  
況當妓館諧談候、況んや妓館諧談の候に當りては、  
怕聽隣雞報曉聲。怕れて聽く 隣雞の曉を報ずる聲。

雁は砂洲に宿り、夜の月は清らかな光を放っている。憂いが  
多く、潮も満ちてきて雁たちは皆悲痛な叫びをあげる。まして、  
妓楼で妓女とおどけた話をしている時には、隣の家の鶏が夜明  
けを告げる声を聞くのが恐ろしい。

15 寄郎曲 郎に寄せる曲（彼氏に送る歌）

多情郎似子都妍、多情 郎は似る子都の妍なるに、  
底事花開蝶不前。底事ぞ 花開くも蝶は前まず。  
願向百花頭上採、願はくは百花頭上に向いて採り、

一飛一舞解情牽。一飛一舞して解く情牽かんことを。

あなた様は本当に愛情深く、古代の美男子都に似ておられる。一体どうした事か、妓女が美しく花開いているのに、蝶にも比べられるあなた様がお訪ねにならないなんて。どうか花のように美しい妓女たちの中で一人を選び、蝶のように飛び舞ひ恋の気持ちが生まれることを願います。

子都・中国古代の美男子。『詩経』鄭風・山有扶蘇「不見子都、乃見狂且」。毛傳「子都、世之美好者也」。牽情・恋心が生まれる。唐・朱慶餘・中秋月「孤高稀此遇、吟賞倍牽情」。

#### 16 病中曲 病中の曲（病氣中の歌）

微軀已似日西傾、微軀は已に日の西に傾むくに似て、  
怕聽喪歌戸外鳴。聽くを怕る喪歌戸外に鳴るを。  
獨臥東窓長寂寂、獨り東窓に臥せば長に寂寂として、  
不知幾日隔幽明。知らず幾日か幽明を隔つるを。

わたくしは、すでに太陽の西に傾くに似て人生の最後に近づき、家の外から挽歌が聞こえてくるのを恐れる。一人で東の窓のもとに臥していると、いつも寂しさが募り、数日間、冥界にいたのかと思うほどである。

微軀・卑しい身分の体。謙遜の言葉。喪歌・葬儀で歌われる歌。曲。挽歌。幽明・生と死。唐・元稹・江陵三夢「平生每相夢、不省兩相知、況乃幽明隔、夢魂徒爾為」。

#### 17 愛我曲 我を愛する曲（私を愛してくれる歌）

嚴冬獨在畫樓前、嚴冬 獨り畫樓の前に在れば、  
忽降紅花色最鮮。忽まち降る 紅花 色最も鮮か。  
幾度香風穿兩袖、幾度かの香風 兩袖を穿ち、  
却疑身在早春天。却つて疑ふ 身は早春の天に在るか。  
紅花不是紅花、直指手巾。 紅花は是れ紅花にあらず、直た手巾を指す。

厳しい真冬に、美しく彩色された楼閣の前になると、妓女たちの赤い手ぬぐいが降ってきて、なんとも色鮮やかである。良い香りの風が何度も我が両袖を吹き抜け、かえつて、まるで早春に身を置くかのようなのである。「紅花」は赤い花を指すのではなく、ただ手ぬぐいのことを言う。）

畫樓・華麗に裝飾を施した建物。ここでは妓楼を指す。

#### 18 夢君曲 君を夢みる曲（あなた様を夢に見る歌）

高樓倦睡漏聲傳、高樓に倦睡すれば漏聲傳ふ、  
忽覺郎君到妾前。忽ち覺ゆ 郎君の妾の前に到るを。  
揭幕推窓人不见、幕を掲げ窓を推すに人見えず、  
祇看山月色娟娟。祇だ看る 山月の色娟娟たるを。

高殿でどうとうしていると、水時計の音が聞こえてきて、ふと、あなた様が私の目にお出でになられたのを感じた。帳を掲げ、窓を押し開いても人影はなく、ただ山の端に差し掛かった月が美しい光を放っているのが見えるだけである。

娟娟…月の明るく美しい様。

19 感物曲 物に感じる曲（物を見て興趣を感じる歌）

一輪明月色鮮妍、一輪の明月 色鮮妍たり、

物換星移萬感牽。物換はり星移り萬感牽く。

人品人心殊不古、人品人心 殊に古ならず、

可師可法是前賢。師とすべく法とすべきは是れ前賢。

空の明るい月は色鮮やかに、時間は過ぎ去り、事物は変化し、感慨はひとしおである。人間の品格や心は、古より変化しないもので、師とすべく則るべきは前代の賢人である。

鮮妍…鮮やかで美しい様。物轉星移…時間は過ぎ去り、事物は変化することを言う。唐・王勃・秋日登洪府滕王閣餞別序「閒雲潭影日悠悠、物轉星移幾度秋」。

20 憶郷曲 郷を憶ふ曲（故郷を懐かしむ歌）

如望雲霓歸故國、雲霓を望むが如し 故國に歸るは、

門閭遙憶夜難眠。門閭 遙かに憶ひ 夜眠ること難し。

曾無旅雁通郷信、曾て旅雁の郷信を通ずる無く、

極目茫茫隔海天。極目すれば茫茫として海天を隔つ。

故郷に帰ることは、虹を遙かに望むようなもので到底手に入れ難く、郷里のことを遙かに思い、夜眠ることができない。空行く雁が故郷からの手紙を伝達してくれることもなく、遙か彼方、故郷の方に目を向けても、果てしなく広がる海の向こうに

故郷は隠れて見ることができない。

雲霓…虹。門閭…郷里を指す。旅雁…渡り鳥のガン。郷信…郷里の家族からの手紙。極目…遠望すること。

21 邂逅曲 邂逅の曲（出会いの歌）

經過臨邛欲曉天、臨邛を經過するに 曉ならんと欲する天、

偶逢史女月中仙。偶たま逢ふ 史女月中の仙。

不嫌四境雞聲達、四境に雞聲の達するを嫌はず、

却恐雲霞起日邊。却つて恐る 雲霞 日邊に起るを。

臨邛を通り過ぎようとする時、ちょうど夜は明けようとしていた。そのとき偶然に、月の中の仙女とも見紛う美女の史女に出会った。朝を告げる鶏の鳴き声が四方に到達するのは構わないうが、美しく色づいた朝焼けの雲が太陽の出る東の空に沸き起り、夜が明けて彼女と別れることになるのを恐れるのである。

史女…妓女を指す。「偶因史女有經水口號絕句四首」にも出てくる。卓文君…前漢の文学者司馬相如の妻。臨邛の富豪の娘であったが、相如の琴の音にひかれて駆け落ちし、相如のために居酒屋で働いた。詩は妓女との出会いを、司馬相如と卓文君との出会いになぞらえている。

22 戲贈同僚陳氏 戯れに同僚の陳氏に贈る

駕馬雖鞭恨不馳、馬に駕し鞭すと雖も馳せざるを恨み、何時尋得似西施。何時か尋ね得ん 西施に似たるを。

羨君男則青樓上、羨む 君が男則たる青樓の上にて、  
投意中宵落雁姿。投意す中宵落雁の姿に。

馬に乗って鞭を振るつても、馬が駆けてくれないように、我が才能が発揮されないことを恨み、いつたい何時、(出世して)西施に似た美人を探し当てることのできるのかと思つている。高くそびえる山のような妓楼において、陳氏が夜半に美しい妓女とねんごろになつてゐることを羨ましく思う。

西施…「西子」とも言う。中国春秋時代、越(浙江)の人、越王勾踐が吳王夫差に献上した美女。後に美女の代名詞となつた。男則…山が高くそびえる様。中宵…夜中、夜半。落雁…『莊子』齊物論「毛嬙、麗姬、人之所美也。魚見之深入、鳥見之高飛」に基づく。後に「落雁沈魚」で女性の美しさを形容。投意…情投意合か。

23 戲贈存留官林氏時任主考 戯れに存留官林氏に贈る 時に主考に任ぜらる(戯れに存留官である林氏に贈る詩 林氏はこの時、科挙の主任試験官に任命された)

君膺仕宦喜陶然、君 仕宦を膺けて喜び陶然たり、  
我苦詞林遜衆賢。我 詞林の衆賢に遜るに苦しむ。  
良楛早分才自短、良楛は早に分れ 才自ら短く、  
尋遊未得買春錢。尋遊するも未だ得ず買春の錢。

林氏は科挙の主任試験官に任命され、甚だ喜んでおられるが、わたくしは同じく詩文の才能で王朝にお仕えする身なが

ら、多くの優れた方々に才能が劣ることに苦しんでおります。才能の良否は若くして明白に分かれ、わたくしは才能なく選抜されず、遊里に遊んでも、友人たちは慰めの酒代も恵んでくれません。

存留官…福州琉球館に在留する琉球の官吏。仕宦…任官すること。詞林…翰林院の別称。文学に優れた翰林学士の集う役所。良楛…精良と劣悪。買春錢…科挙の不合格者に友人が与えた慰めの酒代。『雲仙雜記』買春錢に引用する『承平舊纂』逢原記「進士不第者、親知供酒肉費、號買春錢」。

24 戲求鄭氏邀到娼門二首 戯れに鄭氏に邀きて娼門に到らんことを求む二首(冗談で、鄭氏に遊里に連れて行ってくれとお願ひする。二首)其一  
聞道傾城眼未偷、聞道らく 傾城 眼 未だ偷まざるに、  
迷香洞裏樂悠悠。迷香洞裏 樂しさ悠悠たり。  
何時伴我章臺地、何時か我を章臺の地に伴はん、  
一顧全消一片愁。一顧すれば全て一片の愁を消さん。

絶世の美女というものを、ちらっと盗み見するまでもなく、遊郭の中にいるだけで楽しい気分になると聞いております。いつたい何時になつたらわたくしを遊里に連れて行ってくれるのでしょうか。遊女は、一目見るだけで心の愁いをすべて消さしてしまう存在というのですから。

聞道…聞いたところでは。傾城…国を傾ける程の絶世の美女。ここでは遊女を指す。偷眼…こっそり盗み見する。迷香

洞・遊郭の美称。唐・馮贄『雲仙雜記』迷香洞による。元は妓女が接客する時の最高ランクの場所。章臺・遊女屋の集まる場所。もと長安の街路の名。一顧・一目見る。一片・人の心情、気持を数える時に使う。

25 其二

花顔雲髻國城傾、花顔雲髻に國城は傾き、  
夢繞中宵玉漏清。夢は繞る 中宵玉漏清し。  
對對鴛鴦相戲地、對對たる鴛鴦相戲むるの地、  
何時携我醉瑤觥。何時か我を携へて瑤觥に醉はん。

妓女の美しい容貌、高く結った鬢に國も傾くほどと言います。夜半、水時計が清らかな音を立てるころには、素晴らしい夢がめぐる時間です。寄り添うオシドリのような男女が戯れる場所に、何時わたくしを連れて行き、美しい杯で酒を飲ませてくれるのでしょうか。

花顔・花のように美しい容貌。雲髻・高く結った鬢。傾城・『詩經』大雅・瞻卬「哲夫成城、哲婦傾城」に基づく。鄭箋「城、猶國也」。後に女性が権力を握り、國を破滅させる典故となる。また、美女を指す。玉漏・古代の水時計の美称。瑤觥・玉杯。『集異記』蔣琛「酌瑤觥、飛玉觴」。

26 戲和梁兄同遊娼門韻二首 戲れに梁兄の娼門に同遊せる韻に和す二首（梁兄どのの「妓樓に一緒に遊ぶ」という詩に戯れに次韻する二首）其一

春色腦人錦水邊、春色人を腦ます錦水の邊、  
烟花五色愛中央。烟花五色中央を愛す。  
一雙胡蝶酣香氣、一雙の胡蝶香氣に酣なり、  
聚繞園中引興長。園中に聚り繞り興を引くこと長し。

美しい水辺の春景色（妓女の美しい顔立ち）は人の心をかき乱す、霧にけぶり咲き誇る花々（妓女）は様々に色鮮やかであるが、私は特に黄色の花（妓女）を好む。一つがいの蝶々（妓女と客）が花の香りに酔いしれ、庭中に集まり巡り、興味は尽きない。

春色・春景色。烟花・霧にけぶる花。しばしば、春景色や妓女を指す。錦水・中国蜀（四川）の河の名前。蜀は錦の産地で、錦水で錦を洗うと色が鮮やかになったことから名前がついた。ここは美しい川の意。中央・中国古代では五つの方角を五行に配当し、中央は土を表し、土の色は黄なので、中央で黄色を表した。

27 其二

爭詠娼門第一花、争でか詠まん娼門第一の花、  
渾同西子又毛嬙。渾て同じ西子又た毛嬙。  
魂述意戀終宵是、魂は述べ意は戀ひ終宵是なり、  
歸後猶憐樂未央。歸りて後 猶ほ憐み 樂しみ未央。

遊里の一番の妓女についてどうして詩歌に歌う必要があるのでしょうか。なぜなら、彼女はまったく天下の代表的な美女である西施、毛嬙に等しいからです。私の魂はそのことを語り、私



の気持ちは恋い焦がれ、一晚中そうでした。遊里から帰つてのちも、なお慕われ、恋の楽しみは尽きることがありません。

西子・西施。中国春秋時代、越（浙江）の人、越王勾踐が呉王夫差に献上した美女。後に美女の代名詞となった。毛嬙・中国春秋時代、越の美女。『管子』小稱「毛嬙、西施、天下之美人也」。終宵・一晚中。

28 娼門漫題四首 娼門の漫題四首（遊里について筆任せ四首）其一

昨宵邂逅月中仙、昨宵邂逅す月中の仙、

同夢深情最可憐。夢を同じくし深情は最も憐むべし。

忘却悠悠郷井思、忘却す悠悠たる郷井の思ひ、

高樓旦夕有情天。高樓旦夕 有情の天。

昨夜、月に住む仙女にも等しい妓女に出会った。同じ夢を見、彼女とのお互いを思う深い気持ちはもともと愛おしい。世俗の日常生活での気持ちは忘れ去って、遊里の高殿で朝晩、愛情ある日々を送りたい。

同夢・『詩經』齊風・雞鳴「蟲飛薨薨、甘與子同夢」に基づく。虫が飛ぶ夜明け方、夫婦が同じ夢を見ていることを言う。後に夫婦の愛情の深さを示す言葉となる。

29 其二

鳴騶加策入青樓、鳴騶 策を加へ 青樓に入れば、

國色當前爲我留。國色當前 我が爲に留まる。

無限少年心腦殺、無限に少年 心腦殺され、  
頻斟白酒共遨遊。頻りに白酒を斟み共に遨遊す。

従者が馬に鞭を加え、急ぎ遊里に入ると、国一番の美女が目の前で私のために歩みを止めてくれる。少年の心は限りなくかき乱され、しきりに美酒を注ぎ、その美女とともに遊び歩く。

鳴騶・貴人の外出に付き従い先払いをする従者。貴人を指すこともある。腦殺・惱殺。白酒・唐・李白・南陵別兒童入京詩「呼童烹雞酌白酒、兒女嬉笑牽人衣」。

30 其三

流鶯欲戀百花紅、流鶯戀んと欲す百花の紅、

遠隔東南思不窮。遠く東南を隔て思窮まらず。

乍籍清風飛一羽、乍清風を籍りて一羽を飛ばし、

邱隅相止意相通。邱隅に相止まりて意は相通ず。

美しい鳴き声のウグイスが赤い花々に恋をしようとし、遙か遠くの東南の彼方の地にあつてその思いは極まることがない。急に清らかな風に乗って一羽がここにやってきて、丘に止まっているが、その気持ちは花に通じている。（妓女を恋する男性をウグイスに喩えている）

流鶯・ウグイス。「流」は鳴き声の美しさをいう。邱隅・丘。『詩經』小雅・緜蠻「緜蠻黃鳥、止於丘隅。」

31 其四

欄外春花待露開、欄外の春花 露を待ちて開き、

清香幾度入簾來。清香幾度か簾に入りて來る。  
翩翩胡蝶懷情甚、翩翩たる胡蝶は情を懷ふこと甚しく、  
朝夕徘徊不識回。朝夕に徘徊して回るを識らず。

欄干の外の春の花は、明け方に露が降りるのを待って花開き、その清らかな香りは何度も御簾の中に入ってくる。軽やかに飛ぶ蝶々は感情を胸にしまい込み、朝から晩まで飛び回って、帰ることを知らない。

懷情…感情を抑えて胸にしまいこむ事。南朝・梁・范雲・贈張徐州稷詩「懷情徒草草、淚下雨霏霏」。

32 青樓回後書懷三首 青樓より回りて後に懷ひを書す三首  
(妓樓より戻った後で、氣持ちを書きつける三首) 其一

聯袂良宵妓館中、聯袂す良宵妓館の中、  
一時同醉思無窮。一時に酔を同じくし思は窮まること無し。  
三更徐入芙蓉帳、三更徐に入る芙蓉の帳、  
幾度香風肘後通。幾度か香風の肘後に通ず。

晴れて心地よい晩に、妓女と遊里で手を携え、一緒に酒に酔うと妓女への愛情は限りない。夜中に静かに蓮の花の描かれたとばりに入っていくと、何度も良い香りの風がすぐそばを吹き抜けていく。

聯袂…手を携えること。三更…夜を五等分した三つ目。真夜中。

33 其二

多日飄流妓院春、多日飄流す妓院の春、  
花情酒興夜還晨。花情 酒興 夜還た晨。  
今朝乘汎長行處、今朝乘汎して長行する處、  
無限深情入夢頻。無限の深情夢に入ること頻りなり。

春の日に、遊里に何日間も居座り続けた。妓女への愛情、酒の喜びで夜を日について居続けた。今朝、船に乗って遠くへ出かけることになったが、妓女への深い思いが、夢の中へもしきりに侵入してくる。

飄流…水上を漂流することであるが、ここは遊里にい続けることを言う。

34 其三

雙眉鎖綠亞窓前、雙眉 緑を鎖す亞窓の前、  
回首相憐咫尺天。回首して相憐む咫尺の天。  
談笑伊人真復夢、伊の人に談笑するは真か復た夢か、  
風情月意正如煎。風情月意 正に煎るが如し。

庭の緑を閉じ込めている亜字型の窓の前に、美しい眉の妓女がおり、振り返ってすぐ近くで愛を語らう。この人と談笑しているのは、夢か真か。男女の愛情は本当に火で炒められるように辛い。

亞窓…亜字型の窓。咫尺天…「咫尺天顔」の略。本来は天子の側近く、また、天子の顔を指すが、ここは妓女の顔を指す。

風情月意…風月の情意の意。「風月」は男女間の愛情を指す。

35 寄告紅衣 紅衣に寄せ告ぐ（妓女に手紙で告げる）

従来投意氣、従来 意氣を投じ、  
要待上龍時。待つを要む上龍の時。

夢繞芙蓉帳、夢は芙蓉の帳を繞り、  
誰將結已知。誰か將た結はれしを已に知らん。

これまで、互いの気持ち一致し、出世するまで待つてくれ  
と求めてきた。二人の夢は、蓮の花を描いたとばりを巡るが、  
いったい誰が、もう結ばれたことを知ろうか。

36 小妾寄呈鄭相公三首 小妾 鄭相公に寄呈す 三首（妓

女のわたくしが、鄭の旦那さまにお手紙を差し上げる 三首）  
其一

小妾寄呈鄭相公、小妾は鄭相公に寄呈し、  
多情散入五雲東。多情は散じて五雲の東に入る。

時郎公爲師在首里。時に郎公は師と爲りて首里に在り。  
屋梁落月看顔色、屋梁の落月に顔色を看れば、  
衣帶寬舒錦水中。衣帶は寬舒なり錦水の中。

妓女のわたくしが鄭の旦那さまにお手紙を差し上げます。わ  
たくしの恋する気持ちは散らばって鄭さまのおられる東のかた  
首里の都へと入って行きます。（ちようど、あなた様は皇帝の  
先生となって首里に滞在されておられます）（あなた様のこと

を思つて夜も眠れず）明け方近く、落ちかかる月の光が屋根の  
梁を照らしており、その光に照らされた我が顔つきを見てみま  
すと、わたくしはこの遊里の場であな様のことを思い続けて  
すっかりやつれてしまい、衣装や帯も緩くなつてしまいまし  
た。

五雲…五色の雲で、皇帝の所在地を指す。ここでは首里。落  
月屋梁…唐・杜甫・夢李白詩之二「落月滿屋梁、猶疑照顔色」。

37 其二

小妾寄呈鄭相公、小妾は鄭相公に寄呈し、  
東西雖隔夢魂通。東西隔つと雖も夢魂は通ず。

浮雲終日行天上、浮雲終日 天上を行るも、  
不見良人苦我衷。見ずや良人の我が衷を苦しめるを。

妓女のわたくしが鄭の旦那さまにお手紙を差し上げます。あ  
なた様とは東西遙かに離れ離れではございますが、魂は夢の中  
で肉体を離れて思う人のもとに通うと申します。浮雲は終日空  
を巡つておりますが、あなた様が私の気持ちを苦しめているの  
を見ていないのでしょうか。

良人…女性が夫を呼ぶ呼称。

38 其三

小妾寄呈鄭相公、小妾は鄭相公に寄呈し、  
夢談柳下醒時空。夢に談ず柳下醒時の空しさ。

羨鶯百轉朱門樹、鶯の朱門の樹に百轉するを羨やみ、

解和書聲趣莫窮。解く書聲に和す 趣きは窮まり莫し。

妓女のわたくしが鄭の旦那さまにお手紙を差し上げます。酒に酔って柳の木の下で目覚めた時の虚しさを夢の中でお話ししましたね。ウグイスが富貴の家の門の樹木で盛んに囀っているのを羨ましく思い、あなた様が本を朗読されるのに唱和できたことを思うと、本当に趣き深いものです。

醒時空・宋・李清照・浣溪沙「醒時空對燭花紅」。

39 小妾寄呈梁郎公 爲師在仲里御殿四首 小妾より梁郎公に寄呈す 師と爲りて仲里御殿に在り 四首（妓女のわたくしが、梁さまにお手紙を差し上げる 梁さまは先生となつて仲里御殿に居られる 四首）其一

一朝不見似三秋、一朝見ざれば三秋に似、

隔斷東西類女牛。東西に隔て斷つは女牛に類す。

思逐白雲千里外、思ひは白雲を千里の外に逐ひ、

迷香洞裏未禁愁。迷香洞裏未だ愁ひを禁ぜず。

一日会わないと三年会わなかつたようで、東西遙か彼方に離れていることは牽牛織女のようなのである。わたくしの思いは白雲を千里の外まで追いかけるかのようにあなたのことを思い続けております。ここ遊里の中では悲しみに浸ることは禁じられてはいないからです。

迷香洞・遊郭の美称。

40 其二

迷香洞裏未禁愁、迷香洞裏未だ愁ひを禁ぜず。

搔首中庭月色流。首を中庭に搔けば月色流る。

妾手一雙何夜枕、妾が手の一雙は何れの夜の枕ぞ、

夢魂幾入讀書樓。夢魂は幾たびか讀書の樓に入る。

遊里の中では悲しみに浸ることは禁じられてはいません。中庭で思いつめていると、月光が流水のように静かに私を照らします。わたくしのこの両手は一体いつになつたら、あなた様の夜の手枕となることができるのでしょうか。夢の中ではわたくしの魂は何度もあなた様が読書される樓閣に忍び入っております。

搔首・手で頭を搔く。思いつめた様子。『詩經』邶風・靜女「愛而不見、搔首踟躕」。

41 其三

夢魂幾入讀書樓、夢魂 幾たびか讀書の樓に入り、

請問多情似妾不。請問す 多情は妾に似るや不やと。

屢拂清風郎莫見、屢しば拂ふ清風 郎は見る莫く、

左思右想五更頭。左思右想す 五更の頭。

夢の中ではわたくしの魂は何度もあなた様が読書される樓閣に忍び入り、問いかけました、あなた様の思う人は私に似ていますかと。わたくしはしばしば清らかな風となつてあなた様の顔に吹き付けますが、ご覧になることもなく、夜明け前の時刻

に、わたくしはしばし考え込むのです。

多情・愛情の対象。左思右想・熟慮の様。

42 其四

左思右想五更頭、左思右想す 五更の頭。

凭檻唯看月一鉤。檻に凭り唯だ看る 月一鉤。

燈下聊書詩幾首、燈下聊さか書す 詩幾首、

寄郎知悉妾心憂。郎に寄せ 妾が心の憂を知悉せしめん。

夜明け前の時刻に、わたくしはしばし考え込み、欄干に寄りかかって、細い三日月をただ見ております。夜の灯火のもとで、詩をいく首か書き、あなた様に送り、私の心の憂いをよく知っていただきましよう。

43 偶因史女有經水口號絶句四首 偶たま史女の經水口號絶句有るに因る 四首（偶然、史女どのに「經水口號絶句」の作があったことに因んでの作 四首）其一

數月工夫索歇錢、數月の工夫 錢を索め歇き、

今朝笑詠百花鮮。今朝笑ひて詠ず 百花の鮮。

心猿意馬牽情急、心猿意馬 情を牽くこと急なるも、

怎值靈源湧似泉。怎でか値せん 靈源湧くこと泉に似たるに。

何ヶ月か苦勞してお金をかき集め終えて、今朝は遊里で笑いながら、鮮やかで美しい妓女たちの様子を詩に詠じている。人の心はコントロールが効かず、早くも感情が掻き立てられる

が、靈妙な源泉から泉のように湧き出すものに値しない。

經水・女性の月経を指す。工夫・事に費やす精力と時間。心猿意馬・猿や馬が制御できないように、コントロールできない人の心を言う。牽情・感情を掻き立てる。

44 其二

三三五五入青樓、三三五五 青樓に入れば、

美玉佳人把袖留。美玉佳人は袖を把りて留む。

勸酒幾杯情不厭、酒を勸むること幾杯か 情厭はず、

無端癸水任中流。端無くも癸水中流に任す。

客がパラパラと遊里に入っていくと、美しい妓女たちが客の袖をとって店へと誘う。何杯か酒を勧めると客は満更でもない。しかし、理由もなく訪れる女性の月経は流れに任すしかない。

癸水・女性の月経を指す。

45 其三

春色腦人難自遣、春色 人を腦まし 自ら遣り難し、

粉頭頻索戀章臺。粉頭頻りに索む 章臺に戀するを。

不思想手輕聲說、思はず 手を執りて輕聲に説く、

潮信偏將向夕來。潮信は偏に將に夕に向かひて來らんとすと。

春景色は人を憂鬱にさせ、自分ではどうしようもない。妓女はしきりに遊里での恋の遊びを勧めてくる。思わず、彼女の手

をとって小声で言った。潮の満ち引きの時刻は生憎夕方にやってくるのだからうねと。

粉頭・妓女。

46 其四

駕到烟花淑氣浮、駕して烟花に到らば淑氣浮び、  
花心酒性共悠悠。花心酒性共に悠悠たり。  
陰陽未合風雷聒、陰陽未だ合はざるに風雷聒しく、  
不若中宵夢裏遊。中宵に夢裏に遊ぶに若かず。

馬に乗って美しい妓女のいる遊里に来たところ、ちょうど春の和やかな気が満ちてきた。もてなしてくれる妓女の心も、酒の性質もゆったりとしている。妓女との交わりはまだであるのに急に天候が変化し風が吹き雷が鳴り出した（妓女の機嫌が変化した）。これでは夜半に夢の中で遊里に遊ぶ方がましである。

47 娼門怨三首 娼門の怨み（妓女のなげき）其一

思君滿月清輝減、君を思へば満月も清輝減じ、  
欲待同衾只夢郷。同衾せんことを待たんと欲し只だ郷を夢む。  
幾日春風楊柳拂、幾日か春風楊柳拂ひ、  
雲霓望斷惱愁腸。雲霓に望断し愁腸を悩ます。

あなたのことを思うと、満月の光もその輝きを減じます。一緒にできる日を守っていますが、今は故郷を夢に見るだけです。ここ数日、風が柳の枝を吹く春になりましたが、空に掛か

る虹を遥かに眺め、鬱屈した気持ちをつつそう悩ましています。

同衾…ベッドを共にすること。また、夫婦となること。夢郷…郷里を思い夢に見ること。愁腸…憂え悲しむ心。

48 其二

妾爲薄命苦長離、妾は薄命爲りて長離を苦しみ、  
夢見郎公覺後疑。夢に郎公を見 覺めて後に疑ふ。  
露落月寒穿玉箔、露落ち月寒く玉箔を穿ち、  
分明樓閣奉恩時。分明たり 樓閣奉恩の時。

私は不幸せな運命で長くあなた様と離ればなれでいることに苦しんでおります。夢であなただ様にお逢いしても、覚めてはあれは夢だったのかと疑います。明け方近く、露が降り、月光が寒々と飾り窓から差し込む頃、御殿で恩寵を受けていた時のことをはつきりと思ひ出します。

長離…南方にいた雌雄一对の比翼の鳳凰で、いつも離れずにいたため、「長離」という。玉箔…玉で装飾された窓。美しく飾られた窓。奉恩時…唐・王昌齡・長信秋詞五首其四「真成薄命久尋思、夢見君王覺後疑。火照西宮知夜飲、分明複道奉恩時」。王昌齡詩は、漢・成帝の妃・班婕妤が寵愛を失って、長信宮に退いた時の秋の嘆きを歌う。

49 其三

知否妾思朝暮裏、知るや否や 妾が思ひは朝暮の裏、

難離一刻我郎前。一刻を離れ難し。我が郎の前。

寛舒衣帶同圓月、寛舒たる衣帶は圓月に同じく、幾傍花枝意素然。幾んど花枝に傍ふも意は素然たり。

ご存知でしょうか。私の気持ちは朝から晩まで、一刻もあなた様の前を離れがたく感じております。あなた様のことを思いつめて痩せてしまい、ゆるゆるになった衣装や帯は、丸い月が欠けていくのと同じです。美しい花のそばにいても、気持ちは虚しいばかりです。

50 閨門怨 閨門の怨み（正妻のなげき）

與君結髮歷多年、君と與に結髮して多年を歴るに、莫奈君心逐物遷。奈ともする莫し。君が心の物を逐ひて遷るを。

把鏡試看顔未改、鏡を把りて試みに看れば。顔は未だ改まらず、

緑衣黄裏自憂煎。緑衣黄裏 自ら憂煎たり。

成人してからあなたと共に長年過ごしてきましたが、あなたの心が外的快樂を追求して移り変わっていくことをどうしようもありませんでした。鏡を手にとって我が容貌を映して見るに以前と変わりありません。しかし、正妻としての地位をないがしろにされ、私の心は憂い焦るばかりです。

閨門…寢室の入り口の門。緑衣黄裏…『詩經』邶風・緑衣「緑兮衣兮、緑衣黄裏」に基づく。黄色が正色で緑は間色である。間色を衣に正色を裏地とすることは、身分秩序の転倒になる。

後に、「緑衣」は正妻が地位を失う典故となる。憂煎…憂い苦しむ。

51 懷人卽席二首 人を懷ふ 卽席二首（恋人のことを思う

その場で 二首）其一

獨眠牀上月娟娟、獨り眠れば 牀上に月娟娟、夢在巫山自引憐。夢は巫山に在りて自ら憐を引く。望到芙蓉帷内外、望みて芙蓉の帷の内外に到るも、無聲無影意悽然。聲無く影無く意悽然たり。

一人寝ていると、ベッドの上には月のひかりが明るく差し込み、夢の中で、楚の懷王が夢の中で神女と契ったと言う巫山にいて、恋人と愛を語らった。しかし、目覚めて帷の内外を見渡すも、声無く影も無く、悲しみにくれるのである。

巫山…宋玉「高唐賦」に、楚の懷王が夢の中で巫山の神女と契ったと歌われている。以後、男女の契りを表す。引憐…用例無く不明。

52 其二

誰想年來類女牛、誰か想はん 年來 女牛に類するを、殘燈獨坐思悠悠。殘燈 獨坐すれば思ひ悠悠たり。遙期永夕吟衾枕、遙かに期す永夕 衾枕に吟ず、一片多情似我不。一片の多情 我に似るや不やを。

牽牛織女のような離れ離れの関係が何年間も続くとは誰が

思ったでしょうか。消え掛かった灯火のもとで一人座っている  
と様々な思いが沸き起こってきます。今は、将来に、一晚中あ  
なたと寝床にあつて詩を吟ずることを期待します。あなたの私  
への気持ちは、私のあなたへの思いと同じでしょうか。

53 懐六兄維祥曲蹄婆二首 六兄維祥の曲蹄婆を懐ふ二首

(いとこの蔡維祥(六兄)どのの妓女を懐かしむ二首) 其一  
望似霓裳隊裏仙、望めば似たり、霓裳隊裏の仙に、  
更寒玉指弄清絃。更に寒し、玉指清絃を弄ぶは。  
嬌姿媚態銷魂易、嬌姿媚態魂を銷し易く、  
醉殺遊人昨夜天。醉殺す、遊人を昨夜の天に。

はるかに眺めやると、唐の玄宗皇帝作曲の《霓裳羽衣曲》に  
合わせて踊る仙女のような踊り子たちに似ているが、玉のよう  
な白い指で清らかな弦を奏でる様はいっそう寒々としている。  
艶やかな姿かたちは容易に人の魂を消し去り、昨晩は、遊里に  
遊んだ人々を酔わせてしまった。

蔡維祥…(一八二一?) 蔡大鼎の二歳年長のいとこ。六兄  
は排行で、一族の同じ世代の男子の年長から六番目を指す。咸  
豐元年(一八五一)には接貢使節の一員として中国に渡ってい  
る。『那霸市史 資料篇第1巻6 家譜資料二上』(那霸市企画  
部市史編纂室、一九八〇年) p290・蔡氏家譜(一世蔡崇)。曲  
蹄婆…蛋民(中国華南の沿岸部、河川部で生活する水上生活者)  
の、福建での別称、賤称が「曲蹄」。『福州方言詞典』(江蘇教  
育出版社、1998年)によれば、「曲蹄婆」は「1. 蛋民の

船妓。2. 蛋民の婦女の蔑称」の二義があるが、妓女の呼称と  
しての「曲蹄婆」は、実情として非蛋民を含むものであった。  
『閩縣郷土志』版籍略一(人類) 『侯官縣郷土志』版籍略一(人  
類)(ともに清光緒二十九年(一九〇三)刊本) 参照。

54 其二

偶逢國色着新妝、偶たま國色の新妝を着くるに逢へば、  
一陣春風一院香。一陣の春風一院に香る。  
欲賞難爲胡蝶戀、賞せんと欲するも爲し難し胡蝶の戀、  
胡蝶是指六兄 胡蝶は是れ六兄を指す(胡蝶はいとこの蔡維祥を  
指す)  
纏頭中夜引杯長。纏頭して中夜に杯を引くこと長し。

たまたま国一番の美女が新しくお化粧をしたばかりの時に  
会うと、一陣の春風が庭いっばいに香るようである。褒め称え  
ようとしても、彼女は、六兄どのの想い人、妓女に贈り物をす  
るだけで、私は夜半に彼女を思いながら、いつまでも盃を進め  
るのである。

纏頭…唐代、歌舞の技芸者が演じ終わると、羅絹を贈答して  
頭の上に置いた。これを「纏頭」と言う。

55 和周兆麟贈女史韻 周兆麟の女史に贈る韻に和す(周兆  
麟どのが妓女に贈った詩に次韻する)  
青樓第一掃蛾眉、青樓第一 蛾眉を掃き、  
美目清揚粉不施。美目清揚として粉施さず。



落雁嬌姿欣共見、落雁嬌姿 欣びて共に見、  
沈魚媚態繫予思。沈魚媚態 予が思ひを繋ぐ。  
深憐宋艷朱絃撫、深く憐れむ 宋艷朱絃撫つるを、  
更慕楚娃玉笛吹。更に慕ふ 楚娃玉笛吹くを。  
羨有少年貴公子、羨やむ 少年貴公子有りて、  
歡情忭飲五更時。歡情 忭まに飲む五更の時。

遊里一番の妓女が眉を描き終えると、その美しい眼差しには白粉を掃く必要もない。雁も空から落ちるほどの美貌を共に喜んで眺め、魚も沈むほどの艶やかな様子に私は恋い焦がれる。宋国の美女が琴を爪弾き演奏するのを深く愛しみ、さらに楚国の美人が美しい笛を吹くのを慕う。貴公子の少年が遊里で気持ち良く夜明け近くまで酒を飲んでゐるのを羨ましく思う。

蛾眉・女子の美しい眉毛。美目清揚・美目清秀に同じ。美しい容姿を指す。落雁沈魚・既出。宋艷・宋国の美女。『初學記』卷十九に引用する漢・揚雄『方言』「宋衛晉鄭之間、美色曰艷」。朱絃・熟糸を用いて作った琴の弦。『禮記』樂記「《清廟》之瑟、朱弦而疏越、壹倡而三嘆、有遺音者矣」。楚娃・楚の美人。服虔『通俗文』「南楚以美色為娃」(『佩文韻府』卷九・九佳に引用)。

56 伊保真加、是妓名、將其四字、每句上分用之。俗稱冠首、三首皆類此 其一

伊保真加は、是れ妓名なり、其の四字を將て、每句上のに、之を分用す、俗に「冠首」と稱す。三首は皆な此に類す。(伊保真加(いほまか)は妓女の名前である。その四文字を

各句の頭に用いた。これは俗に「冠首」という。三首ともにこの技法を用いている)

伊人窈窕意纏綿、伊人の窈窕にして意は纏綿たり、  
保護郎公粉黛妍。郎公を保護し粉黛妍なり。  
真有傾城嬌媚態、真に傾城嬌媚の態有り、  
加情鍾愛貼花鈿。情を加へ鍾愛し花鈿を貼る。

この伊保真加さんは、美しい容姿で、情の深いかたです。旦那さまを氣遣つて心を尽くされ、化粧姿はじつに美しい。国を傾けるほどの美貌で柔和な仕草を持ち、額には唐代の化粧を施した姿で、深く愛してくれる。

伊保真加・「伊保」と言う遊女屋の「真加」と言う名の妓女の可能性がある。小野まさ子氏より教示を受けた。伊…これ、この。窈窕・美しい様子。纏綿・気持ちの深く厚いこと。郎公・夫を指す。粉黛・おしろいと眉すみ。化粧。嬌媚・姿や声の麗しさが人の心を動かすこと。鍾愛・特別に好むこと。花鈿・唐代の化粧法。花の形に切った紙などを額に貼ること。

57 其二

染成黛色美人來、黛色を染め成し美人來り、  
獻媚含嬌笑語陪。媚を獻じ嬌を含みて笑語して陪す。  
眞假之情何可辨、眞假の情は何ぞ辨つ可けん、  
加金聊進合歡杯。金を加へ聊か進む合歡の杯。

眉毛を青黒く描いた美人が訪れて、陪席して媚びを売りなま

めかしい表情、仕草で、笑ったり話しかけたりする。本当に愛してくるのかそうでないのかの区別は測りがたい。花代をはずんで、しばし歓楽の杯を交わすでしょう。

黛色・青黒い色。獻媚・人に気に入られようとして、好まれる姿や動作をすること。含嬌・媚びた表情をすること。笑語・談笑すること。合歡・喜びを共にする。

58 其三

海棠麗色看難厭、海棠の麗色 看れども厭き難し、戀紫貪紅意自牽。紫を戀い紅を貪り意自ら牽く。

一樣溫柔誰是最、一樣の溫柔 誰か是れ最なる、加那撫媚獨爭妍。加那は撫媚にして獨り妍を争ふ。

加那妓名。

加那は妓名なり。

海棠の花のように美しい加那さんは、ずっと見つめていても見飽きない。紫や紅の海棠の花を愛でるように、私の気持ちは加那さんに引かれる。遊女は誰もが同じように穏和で優しいが、だれが一番であろうか。加那さんこそが、見目麗しく、一人だけ海棠の花と美しさを競っている。

海棠・ハナカイドウ。中国原産の落葉小高木。花は四、五月頃に咲き、淡紅色。麗色・美しい色。一樣・同様。差の無いこと。溫柔・穏和で従順。嫵媚・姿の美しくかわいらしい様子。

59 邀請同僚梁阮陳三位 同僚の梁・阮・陳の三位に邀請す  
(同僚の梁・阮・陳のお三方を招く)

曾失名花錦水旁、曾て失ふ 名花 錦水の旁、  
只今聊采夜來香。只だ今 聊か采る 夜來香。  
期君日暮風涼候、期す 君 日暮風涼の候、  
共入青樓縱酒狂。共に青樓に入りて酒狂を縱にせんことを。

以前、この錦水のほとりの遊里で、名花にも比すべき素晴らしい妓女がいましたが、今はもういません。そこで今とりあえず彼女に代わる夜來香の花のような妓女を選びましょう。夕方、風が涼しくなる頃、お三方と一緒に遊里に行き、酒を存分に飲めたらと期待しております。

夜來香・キョウチクトウ科の植物。中国南部原産で、開花時、強いよい香りを放つ。

60 邀請魏先生啓時在妓家（魏先生を邀請する啓 時に妓家に在り）

數日以來、相逢相値、且銜玉盃。其樂趣正復何如。現今、有花有酒、只恨無劉伶之輩也。敢求臺下、火速携帶名花、駕臨妓園。曷勝懸望之至。謹啓。

數日以來、相逢ひ相値りて、且つ玉盃を銜む。其の樂趣は正に復た何如せん。現今、花有り酒有るも、只だ恨むらくは劉伶の輩無きことを。敢て臺下に求む、火速に名花を携帶し、駕して妓園に臨まんことを。曷ぞ勝へんや懸望の至りに。謹して啓す。

ここ数日、魏先生にお会いして酒を酌み交わしました。その楽しみは例えようありません。いま、こちらの妓家には美しい妓女と酒が揃っていますが、残念なことに西晋の劉伶のようなこよなく酒を愛する人物を欠いています。あえて魏先生にお願いいたします。早急に美しい婦人を従えてこちらにおいでいただくことを。懇望に堪えません。謹みて申し上げます。

劉伶…三国魏、西晋の文人。竹林の七賢の一人。酒好きで逸話は多い。『酒徳頌』を著した。火速…急いで。

61 邀請孫先生啓時在妓家（孫先生を邀請する啓 時に妓家に在り）

從獨賞遊百花、不如與衆至酌酒兵。亦然。今生獨寓錦水濱。懸望有朋友來。伏希台下。早駕扁舟。按臨其濱。一共詠花酌酒。俾生解茅塞之悶。是幸甚矣。

獨り百花に賞遊する從り、衆と與に酒兵を酌むに如かずは、亦た然り。今生獨り錦水の濱に寓し、朋友の來たる有るを懸望す。伏して台下に希ふ、早に扁舟に駕して、其の濱に按臨せんことを。一たび共に花を詠み酒を酌まば、生をして茅塞の悶を解かしめん。是れ幸なること甚し矣。

一人で美人を楽しむより、多くの人と一緒に酒を酌み交わす方が良いというのも事実です。今私はひとり遊里で過ごしており、友人の来てくれるのを切望しております。伏してお願いいたします。早々に小舟に乗って、私のいる遊里に巡視にお出で

にならんことを。一旦、一緒に美人を詩にして酒を飲めば、私の憂いの気持ちも解き放ってくれるでしょう。これ以上の幸福はございません。

酒兵…酒を兵に例えたもの。『南史』陳暄傳に基づく。茅塞…チガヤなどで塞がれることを言う。思考が閉塞して愚昧無知なこと。謙遜の辞に使う。『孟子』尽心・下に基づく。

62 邀請毛先生啓時在妓家（毛先生を邀請する啓 時に妓家に在り）

凡歡樂之事。莫大乎色酒。却不可不爲之節。其術豈有他哉。然不得不邀請益友也。目今愚弟。久羈青樓。日醉紅衣。月酹白酒。而不知晨昏相換。歲月迭行。恐有元神之不存。而隔幽明。懷憂不小。殊望先生。火速登樓。保全其命。則戴再造之德。爲之特啓。

凡そ歡樂の事は之れ色酒より大なるは莫きも、却って之れが節を爲さざるべからず。其の術豈に他有らんや、然らば益友を邀請せざるを得ざる也。目今愚弟は、久しく青樓に羈ぎ、日に紅衣に酔ひ、月に白酒を酹しみ、而して晨昏の相換り、歲月迭に行くを知らず。恐らくは元神の存ぜざる有りて、而して幽明を隔て、憂いを懷ふこと小さからず。殊に先生に望む、火速に登樓せんことを。其の命を保全すれば、則ち再造の徳を戴せん。之が為に特に啓す。

そもそも、人生の歡樂は女性と酒以上のものはないが、か

えって、それに対して節制しないわけにはいかない。節制の方法はこれ以外にないので、有益な友人を招待しないわけにいかない。今わたくしは、遊里に長居して、日々、妓女に酔いしれ、一ヶ月も美酒を楽しみ、朝晩の経過し、歳月の過ぎ行くのに気がつかないでいる。おそらくは靈魂を消耗し、鬼神の世界に迷い込み、憂い悲しむこと甚だしい。特に毛先生にはお願いする、どうか早急に遊里においでにならんことを。我が命をお助けくだされば、命を再び与えるような優れた道徳を施行することになります。そのため特にお手紙を差し上げるのです。

白酒・美酒。唐・李白・南陵別兒童入京「呼童烹雞酌白酒、兒女嬉笑牽人衣」。

本稿は、平成26―28年度科学研究費助成事業（基盤研究（B））「新出資料による琉球処分紀琉球知識人の総合的研究―そのアイデンティティに着目して」（代表者・高津孝）による研究成果の一部である。